

メキシコのドラキュラ伯爵 — カルロス・フエンテスの「ヴラド」

石井 登

1. はじめに

「カルロス・フエンテス幻想文学への帰還」

これは、今回論じる作品となる短編「ヴラド (Vlad)」¹を含む、2004年に発表された作品²、『心細い同伴者 (*Inquieta compañía*)』を飾るステッカーの言葉である。日本国内でも、フエンテスは主に中編『アウラ』や短編「チャック・モール」などの幻想的な作品と『アルテミオ・クルスの死』や『老いぼれグリンゴ』のような歴史小説的な作品で知られているのではないだろうか。そして『心細い同伴者』はフエンテスの作品では先の言葉の通り、幻想短編集として位置づけられるだろう。この短編集は「テアトロの恋人 (*El amante del teatro*)」、「母の雌猫 (*La gata de mi madre*)」、「善良な同伴者 (*La buena compañía*)」、「カリスタ・ブランド (*Calixta Brand*)」、「眠れる美女 (*La bella durmiente*)」、「ヴラド」の6つの短編からなり、「ヴラド」はその最後の6編目に当たる³。

メキシコ人作家、カルロス・フエンテスの略歴について本論では詳しくは触れない⁴が、現代メキシコという一国の文学のみならず、1960年代の世界的なラテンアメリカ文学の《ブーム》における中心的人物であり、2008年には新作を発表し80歳を迎えるなど、まだまだ現役の作家である。一般にフエンテスの作品はメキシコのアイデンティティの探求という観点から論じられることが多いが、近年の作品から考えると、一国の文学、あるいは地域文学として論じるのではなく、さらに広い視野から論じることが必要に思われる。

2008年11月、メキシコシティでフエンテス生誕80周年を祝う国際会議が行われた⁵。そこでもまたフエンテスの文学におけるメキシコの重要性を中心に論じられる発表が多かったが、ゲストとして参加していたラテンアメリカ文学の著名な研究者であるフリオ・オルテガは、むしろ彼のコスモポリタンな資質の重要性を強調していた。今後のフエンテスの作品研究においては、メキシコ性というテーマのみならず、オルテガの指摘するコスモポリタンな資質を踏まえた上での関係性としての作品研究とでも言えるような視点がますます重要になってくるのではないかと考えられることから、筆者はオルテガを支持したい。

この関係性という視点からフエンテスの作品を論じる場合、特にパロディ、他者性、家族、そして現代政治などが、主なキーワードとなってくるのではないかと考えられる。そして「ヴラド」には、恐らくこのすべての要素が含まれているものと思われる。本論

文では家族や現代政治の問題について詳しくは触れないが、家族の問題についてフエンテスは、息子ラファエルを HIV で亡くし、娘ナターシャもまた、この『心細い同伴者』の出版後に亡くしており、彼にとってこの問題が重要であることは想像に難くない。また現代政治についても、『心細い同伴者』を扱ったインタビューの中で、フエンテスはこのタイトルを象徴するものとして、アメリカ合衆国のジョージ・ブッシュ元大統領や 2006 年のメキシコ大統領選挙で制度的革命党 (PRI) の候補者であったロベルト・マドラソの名を挙げる⁶など、政治を絡めた読みの可能性を示唆している点を指摘しておきたい。

本論文では、ブラム・ストーカーの『吸血鬼ドラキュラ』を起点にして「ヴラド」の読みへと繋げていく。そこにはさまざまな吸血鬼小説や映画などの先行作品との関係からパロディ的要素を読み取ることができるであろうし、吸血鬼の位置づけといった問題も現れてくるであろう。そして、ヨーロッパからメキシコへ渡ったドラキュラが、文化的な融合のシンボルとなるとともに、相互の関係としての他者性についてのフエンテスの問題意識が現れてくることを示したいと思う。

2. 「ヴラド」の起源

はじめに、このフエンテスの作品のタイトルとなっている「ヴラド」と吸血鬼の関係について考えてみたい。ヴラドとは、ブラム・ストーカーの『吸血鬼ドラキュラ』のモデルとなった実在の人物であるルーマニア、ワラキアのヴラド串刺公 (1430/31-1476) である。そして「ヴラド」の中でメキシコへやってくるヴラド・ラドゥ⁷もまた、『吸血鬼ドラキュラ』と同様にこのヴラド串刺公をモデルとしたものである。それは「ヴラド」の文中で、主人公イヴ・ナバロのパトロンであるエロイ・スリナガが彼に渡した紙片に、ヴラドの歴史が語られていることから明らかである。

ヴラド串刺公の父、ヴラド悪魔公は、1431 年に神聖ローマ帝国のジギスムンドより、龍の勲位を授けられ、龍の騎士団に加わってトルコの異教徒と戦うことになった。ドラクルはその龍の意味に由来するとされ、彼はヴラド・ドラクルと呼ばれる。そして、その息子であるヴラド串刺公は、ドラクルの息子として、ヴラド・ドラクラ (あるいはドラキュラ) と呼ばれることになったというのが一般的な説である。

このヴラド串刺公は、異教徒や彼の反対者を串刺しにして、戦場やワラキアの村々の周囲に晒し、その残虐性によって恐れられていた。しかし、ルーマニアの歴史学者ニコラエ・ストイチエスクの『ドラキュラ伯爵のこと』によれば、このような残虐な振る舞いは、当時の貴族には一般的なことであったとされる⁸。それは、ジュール・ミシュレの『魔女』における、中世を要約する言葉である「模倣」のことであり⁹、ヴラドもまた、自らの統治と罪の審判に関して、確信を持って行っていたことは、彼の恐怖政治によっ

て犯罪が無くなったと伝えられることなどから伺うことができる。

ヴラドが特異な存在となったのは、トランシルバニアの商人たちや土地の貴族たちをも敵と同じように串刺しにして、彼らに恨まれていたことによるものであると考えられる。この点についてストイチェスクは、「彼への最も強い非難のひとつは、彼が多く
の地主貴族を殺したことだった。しかし、これは残虐行為にふけるために遂行したのではなく、決定的な政治的目標を実現するためだった。」¹⁰と述べている。残虐行為はヴラドが望む中央集権的な政治体制にとっての弱点であった特権的な地主階級の派閥争いを抑えるためだったのである。また、この貴族たちに近づいて利益を得ていたトランシルバニアなどの外国人商人たちも、ワラキアの国内経済の保護のために犠牲となったが、彼らは様々な策を用いてヴラドを失脚させようとした。その中にヴラドの残虐性についての言説の流布があった。

ヴラドについての言説は実際には政治的な立場から、好意的なものと悪魔的存在として扱われたものに分かれている。ストイチェスクは「ヨーロッパ三地域の記録、文学に登場するツェペシュには、それぞれ地域的特長がみられる」¹¹とし、南東ヨーロッパでは勇敢無比で正義の人、また厳しい君主、東ヨーロッパでは専制君主の典型、そして中央ヨーロッパでは残酷、悪辣な君主として扱われているとしている。ツェペシュの言説については、歴史的資料として、主に西ヨーロッパへ流れた『ドイツ語物語』とロシアなどで知られている『スラブ語物語』などがあり、ストイチェスクは、J・ストリーデルがおこなった両物語の比較について論じている。その中に、次のような記述がある。

両物語を比較して、両者はエピソード数の多いか少ないかのほか、ワラキア公に対する政治的評価——これがより重要——が違っているのに注目した。例えば、『ドイツ語物語』は、ツェペシュに対して明らかな敵意を示し、公の在位時代より公の中傷を謀み、公を暴君、悪魔的残忍な人物、虐行淫乱症に陥った野蛮人として扱った。これに対し『スラブ語物語』は、ドラキュラに好意的態度をみせ、偉大な支配者、国民に誠実、正義たらしめるために暴力を用い、これにより専制君主のモデルになった。¹²

ストイチェスクは、このようにヴラド解釈に関して中心となる歴史的文献について要約しているが、ヴラドの言説は彼との関係から生じてきている。ブラム・ストーカーはその中で、ヴラドに「明らかな敵意を示す『ドイツ語物語』などにおけるヴラドの言説を利用して、『吸血鬼ドラキュラ』を創作したと考えられる。そのため、この作品は政治的に反ヴラド、反ドラキュラ的な位置にあることが理解できる。そして、ドイツ文

学と歴史の研究者、ラルフ＝ペーター・マールティンが、「ストーカーまで、ヴラドを吸血鬼伝説と結びつけたものは文学の伝統に形成されなかった」¹³と指摘するように、ヴラドを吸血鬼と結びつけたのはストーカーが最初である。

日本では、武藤浩史が『吸血鬼ドラキュラ』の政治性について分析を行っている。「イギリスとアイルランドの間には吸血イメージをめぐる長い歴史がある」¹⁴とし、ブラム・ストーカーの出身地アイルランドとその宗主国イギリスでは、互いを野蛮、あるいは吸血行為に喩えてきたことを紹介している。両国のメディアが互いを吸血鬼とし、吸血蝙蝠の絵を使って争っていたのである¹⁵。これは『吸血鬼ドラキュラ』が出版される1897年以前のことで、ストーカーの作品の背景にも、アイルランドとイギリスの政治的対立の文脈が隠れていることを武藤は指摘している。

また、丹治愛は『吸血鬼ドラキュラ』をイギリス、ヴィクトリア朝における「外国恐怖症」の視点から考察している。1896年が初出であるとされる「栄光ある孤立」という言葉を挙げ、イギリスの孤立と合衆国やドイツに対する不安、ユダヤ人恐怖、コレラ恐怖などの点から、『吸血鬼ドラキュラ』の中に対立する自己と他者の関係を読み取っている。

『吸血鬼ドラキュラ』の時代である19世紀において、このような対立の文脈があったのは事実だろう。それは恐らく帝国主義による世界分割や国家間の競合によって、異文化としての他者が非常に身近に感じられるようになったと考えられるこのような時代において、顕著に表面化してきた問題であるように思われる。しかし、文化的側面から見たとき、むしろこれらの接近は対立とともに融合をも生み出しているともいえるのではないだろうか。

3. 『吸血鬼ドラキュラ』と吸血蝙蝠

「ヴラド」の作品中で、ヴラドが主人公のナバロに対して、先祖の家への郷愁について語る箇所がある¹⁶。この言葉を考えながらブラム・ストーカーの『吸血鬼ドラキュラ』を読み返してみると、ドラキュラと誤解されているもの、あるいは血を吸う生き物として、新大陸の吸血蝙蝠が話題にされている。小説中には次のような文章がある。

ぼくはパンパスにいたころ馬をもっていてね、夜半に草原に放して草食わせておくんだ。するとね。あのへんで『吸血鬼』といっている大きな蝙蝠がいてね、こいつが馬の生き血を吸うんだな。¹⁷

「パンパス」は日本ではパンパとして知られる南米アルゼンチンの平原のことであろう。新大陸の吸血蝙蝠は「吸血鬼」と呼ばれている。

大平原では、夜な夜な大蝙蝠が牛や馬の血を吸って殺すという話だし、大西洋諸島では、そういう大蝙蝠が昼間は木にぶら下がっていて夜になると、船の船員たちが熱いので甲板に寝ているところへ下りてきて、朝になってみると、みんなルーシーみたいに白くなって死んでるという話だぜ。¹⁸

「大平原」は原文では the Pampas でやはりアルゼンチンの平原のことであると思われる。ここでもまた、新大陸の蝙蝠のことを話題にしている。さらには、

私はどうも蝙蝠じゃないかと思うのですがね。ロンドンの高台には、だいたいいるんです。たいがいは無害のやつですが、なかにどうかすると、南洋にいる有害のやつがいることがありましてね。¹⁹

これらの引用箇所から理解できるのは、『吸血鬼ドラキュラ』の登場人物たちが、当初は、新大陸やカリブ海と思われる南洋には血を吸う蝙蝠が実在していると聞けけれども、ロンドンにもそのような蝙蝠が現れたのではないかと考えている、ということである。

『吸血鬼ドラキュラ』の中で、ドラキュラと間違えられる吸血蝙蝠は正しくはチスイコウモリと呼ばれ、メキシコ、中南米、カリブの島々に生息するとされている。レイモンド・T・マクナリーとラドウ・フロレスクの『ドラキュラ伝説』には、このチスイコウモリについて次のように書かれている。

スペイン人エルナンド・コルテスが新大陸にやってきたとき、彼はメキシコで血を吸う蝙蝠の存在を発見した。伝説上のヴァンパイアを想起した彼はそれを“吸血蝙蝠”と名付け、そのよび名が後まで用いられることとなったわけである。²⁰

本当にコルテス自身が吸血蝙蝠を発見したのかは定かではないが、血を吸う悪魔の化身と結びつけられるであろうチスイコウモリが、エルナン・コルテスによるメキシコ征服の際にヨーロッパの人々の側から発見されたことは恐らく間違いないだろう。

生物学者ビル・シュットは吸血動物の専門家であるが、彼はチスイコウモリについてのフィールドワークを行い、『闇の宴 (Dark Banquet)』という著書の中で、この動物について論じている。彼もまた、蝙蝠の分類についての説明の中で、吸血種の蝙蝠の生息範囲を「メキシコ、中南米の暖かい地方やトリニダードとマルガリータの島々」²¹としている。そしてシュットはヨーロッパの蝙蝠については次のように述べている。

血を食料とする種がまったく存在しなかったヨーロッパに生息する蝙蝠は、
だんだんと吸血鬼の存在と絡められていった²²（強調原文）

ヨーロッパには吸血の種は「まったく存在しなかった」のであり、野生の吸血蝙蝠が生息しているのは新大陸であるということになる。そしてヨーロッパには存在しない吸血蝙蝠が吸血鬼と文化的に「絡められていった」のである。

長山靖生は「狼の血と伯爵のコウモリ」というエッセイの中で次のように語っている。

今日でこそ、吸血鬼にコウモリは付き物だが、ヨーロッパの古い伝承には、ほとんどまったくコウモリは出てこない。私の知る限りでは、古ロシアの大コウモリ伝説があるくらいだが、これとても、人間との間に邪悪な契約を結ぶ存在であることから《コウモリの翼を持った者》即ち悪魔に分類すべきだと思われる。コウモリは悪魔もしくは怪鳥伝説の変形として、わずかに現れるのみである。²³

つまり、ヨーロッパの吸血鬼伝説の起源に蝙蝠は結びついていないということである。そして長山は、「古くから、コウモリと吸血鬼を直接に結びつけた伝説を持っていたのは、インカをはじめとする中南米の諸民族だった。というのも、彼の地には本物の吸血コウモリがいて、しばしば家畜や人間が襲われていたからである」²⁴とも語る。そして、「ヨーロッパの吸血鬼伝説に吸血コウモリの影響が現れるのは、従って当然、新大陸発見以降のことだった」²⁵と説明している。

吸血蝙蝠の存在は、現在のドラキュラ、あるいは吸血鬼のイメージの象徴として、切っても切れない関係となっているのは異論のないことであろうが、その起源を求めると、実は新大陸であったと考えられるのである。そして、吸血鬼に関するイメージといった文化的側面から考えると、『吸血鬼ドラキュラ』では新旧大陸のものが融合した姿を現している。『吸血鬼ドラキュラ』を新大陸の側から眺めるとき、吸血鬼文学を構成する一つの起源が新大陸にあることを、このフエンテスの「ヴラド」は想起させるだろう。したがって、ストーカーとフエンテスのこれら二つの作品では、吸血鬼というテーマにおいて、新旧大陸が時間を超えて互いに共鳴し合うこととなる。

4. 吸血鬼とメキシコ

吸血蝙蝠の起源は新大陸であったが、吸血鬼そのものの伝承についてはどうかと考えると、これは世界中に広がっている。一般的には東欧の国々におけるものが知

られているが、ブラム・ストーカーの出身地であるアイルランドもまた、多くの吸血鬼伝説があるとされる。他にもインドの羅刹や中国のキョンシーなど、吸血鬼の伝説は世界中で見つけることができるだろう。その歴史的起源は、恐らく人間がまだ文字を持たず、野生の生活をしていたころ、血が生命において重要なものであり、血が流れると人が死ぬという漠然とした観念が生まれたといったところまで遡ることができるのではないかと考えられている。

では、カルロス・フエンテスの母国であるメキシコの吸血鬼についてはどうだろうか。メキシコの場合は、イギリスの聖職者、ゴシック文学者、オカルト研究家として知られるモンタギュー・サマーズが、「シワテテオ」という女神を吸血鬼として挙げている。この女神は、夜に十字路に²⁶現れて子供をさらったりする魔女＝吸血鬼的な存在である。また、このシワテテオは、ナワトル語で女を意味する接頭辞であるシワ(cihua-)と、神を意味するテテオ(teteoh)から成り、「女-神」を意味する名称である。さらにサマーズはその他のメキシコの吸血鬼として骸骨の姿を持つミクトランパの神とその妻であるミクテカシワトルといった名前を挙げている。彼らはミクトラントル(死者の王国)の神々である。ここで留意すべき点は、サマーズによって吸血鬼であるとされるこれらの存在がメキシコ先住民のあいだでは神として扱われていたことである。

他のメキシコの神々についても、やはり血と深い関わりを持っていると考えられる。神々は自らの血で人間を作ったという伝説から、人間は血と肉を永遠に神々に負っているとされる。そこで人々は「血の負債」といった考えを持ち、神々への奉仕のため人々は食料として生贄を捧げていたといわれている。メキシコ先住民の間にあったと考えられているカニバリズムは、このような理由から、神々の食料を体内に入れることで、その神聖を得るという意味を持っていたと指摘されている²⁷。メキシコのミチョアカンでは生贄の身体を神官たちが分配し、それを食べていたという。ル・クレジオは『チチメカ神話』の中で、「クエラウアペリ母神は不意にある人間の身体にはいり、この者は気を失って倒れた。やがてこの者は自ら進んで生贄を志し、生血をたっぷり飲ませられた」²⁸と述べている。またその訳注では、この母神が若い男女の身体に乗り移り、その血を飲む²⁹と説明されている。そして、スペイン人による征服の際に、彼らを神の再来と信じたアステカの人々は、彼らを人の血で浸した食物でもてなそうとしたのである。

これらのことから、かつて血を飲むという行為は民間伝承としての神々によるものだけではなく、人々の文化の中にも根付いていたと考えられる。現在は存在しないが、かつてはそのような文化を持っていたということである。メキシコにはモルディーダ(mordida)³⁰という言葉があるが、これはいわゆる賄賂のことで、吸血鬼を「人を食い物にする」という意味で用いる一種のヴァンピリズム的用法といえよう。モルディーダ

についてのこのような用法が、スペインでは恐らく一般的ではなく、メキシコにおいては、警官や役人への上納といった意味での賄賂と捉えらるゝとするならば、それがまるで吸血鬼に血を捧げるかのような比喻もあり得ることであろう³¹。このような用法は、何かメキシコという土地での吸血と文化との関係を思い出させるのではないだろうか。

5. 先行するテキスト・映画

これまで、ヴラド・ツェペシュと、吸血蝙蝠から読み取ることができる吸血鬼文学を構成する要素の一つの起源、そして吸血とメキシコの文化について考えてきたが、フエンテスの「ヴラド」では、『吸血鬼ドラキュラ』のみならず、その他のさまざまな吸血鬼文学作品や映画を想起させる言葉や話題が盛り込まれている。テキストの関係性についての大著『パランプセスト』の著者、ジェラルド・ジュネットは、「パロディ的変形は、(中略)特徴的で容易にそれとわかるような表題や常套句と結びついており」³²と述べているが、この「ヴラド」は、そのタイトルが示す通り、パロディの形式から読むことが有効であるように思われる。ポスト・モダニズムの批評家であるリンダ・ハッチオンは、ジュネットの研究について、「パロディを詩、諺、地口、題名といった短いテキストに限定したがっているが、現代のパロディはこの限定を無視しているようだ」³³と批判し、キューバの出身の亡命作家、カブレラ＝インファンテの『三頭の悲しき虎』におけるポピュラーソング「グアンタナメラ」の関係などを挙げている³⁴。さらにハッチオンは、「必ずしも同じ媒体、同じジャンルでなくてもよいのだ。文学は文学以外の伝達形式をパロディ化するのでよく知られている」³⁵と述べている。吸血鬼といったテーマを扱う場合、小説のみならず、映画の存在も重要になるだろう。そこで、この章では、『吸血鬼ドラキュラ』以外のテキストや映画との関係についても考察してみたい。

「ヴラド」ではルーマニアやメキシコの他にも、ヴラド自身が現れた土地として、ロンドン、ローマ、ブレマーハーフェン、ニューオリンズを挙げている。ロンドンはもちろんトランシルバニアと並んで『吸血鬼ドラキュラ』の舞台であるが、ローマはキム・ニューマンの『ドラキュラ崩御』の舞台である。ブレマーハーフェンはブレーメンの都市で、映画『ノスフェラトゥ』での、吸血鬼オルロック伯爵がやってくる土地であると思われる。また、ニューオリンズは映画『インタビュー・ウィズ・ヴァンパイア』とその原作であるアン・ライスの『夜明けのヴァンパイア』の舞台となる地名であり、この主人公ルイは、ニューオリンズで育ち、レスタトによって吸血鬼にされる。いくらか吸血鬼小説や映画について知識があれば、これらの地名が示す先行テキストについてはすぐに浮かんできそうである。

また、先行テキストを考慮に入れた上で、すぐに浮かぶ名前として、吸血鬼ヴラドの他にも彼が娘として紹介する少女ミネアが挙げられるだろう。このミネアは、実際

にはヴラドを吸血鬼にした母となる吸血鬼でもある。そして、彼女は『吸血鬼ドラキュラ』の主人公の一人ミナから採られたものであると考えられる。『吸血鬼ドラキュラ』において、19世紀末当時の新しい女性でありドラキュラ伯爵の犠牲となってしまうルーシーとは反対に、このミナは保守的な女性の象徴として読まれ、ドラキュラに血を吸われてしまうが、彼女の献身と活躍でドラキュラは倒される。『吸血鬼ドラキュラ』では、作品の読みの一つの鍵になる女性であるとされる。では、「ヴラド」におけるミネアの場合はどうであろうか。

「ヴラド」におけるミネアは、外見上年月に影響されず変化しない少女である。ナバロの娘マグダレーナの友人となるミネアは10歳ほどの女の子であり、ヴラドと出会った時と、主人公ナバロの娘マグダレーナとともにいるときも、そのままの歳の姿でいる。そして、吸血鬼になった人間の年齢のままで不死を得てしまうこと。これはアン・ライスの『夜明けのヴァンパイア』や『インタビュー・ウィズ・ヴァンパイア』におけるテーマの一つである。

『インタビュー・ウィズ・ヴァンパイア』では、母を失った娘クロードディアが登場するが、彼女は子供の姿のまま不死者となる。そして彼女は肉体的に成長しないことに苦しみ、自分を吸血鬼にしてしまったレストを裏切って愛し合うルイとともにパリへ移り、そこで他の吸血鬼たちと出会う。パリの吸血鬼であるアーマンドはルイに「幼子を仲間にするのは、禁じられている。生きていけないからだ」と語る。クロードディアはルイと別れるために、彼女の母となることを望む子を亡くした女³⁶を連れてくるが、レストを殺した罪で二人ともパリの吸血鬼に処刑されてしまう³⁷。肉体的に幼いまま精神だけが成長してしまうアンバランスがこの悲劇を招いている。

「ヴラド」ではクロードディアと同じようにミネアが幼いままの姿でいるのに対して、ヴラドの方は老人の姿であったり若返ったりする。フランシス・フォード・コッポラ監督の映画『ドラキュラ』では、ドラキュラ城で老人だったドラキュラが、ロンドンでミナと出会うときには若返り、ミナの夫ジョナサン・ハーカーを驚かせる。そして若返ったドラキュラはミナと愛し合う。同様に「ヴラド」におけるヴラド・ラドウもまた、ナバロが語るように「思い通りにその歳を選ぶこと」³⁸ができる。

この二つの事柄、『インタビュー・ウィズ・ヴァンパイア』でのテーマであった幼くして不死を得る苦悩と『ドラキュラ』での見かけの年齢の自由という矛盾。「ヴラド」における幼いままのミネアと年齢を選ぶことができるヴラド。ヴラドはナバロに「ミネアは決して成長することがないだろう!」³⁹と語る。フエンテスはこの二つの事柄を並列させ、その矛盾を作品に内包させている。つまり、『インタビュー・ウィズ・ヴァンパイア』と『ドラキュラ』のそれぞれが持つ矛盾する事柄を作品内で衝突させることで、先行する作品に対して「ヴラド」の批評的立場を生み出している。前述のハッチオンは

パロディの定義の一つとして、「批評的距離を持った反復」⁴⁰としているが、この「ヴラド」は複数の先行テキストや映画を反復しながら、その矛盾を突いている。このような関係において、一種のパロディとして読むことができるだろう。

6. 吸血鬼＝神

前章でヴラドの娘ミネアと『吸血鬼ドラキュラ』のミナの名前について触れたが、カルロス・フエンテスの「ヴラド」では、登場人物の名前について考察することから、作品の解説に繋がっていくように思われる。吸血鬼小説と名前の関係については、先行するテキストでも現れてくる。例えば、『吸血鬼カーミラ』では、「ミラーカという名前は、これはこの本名を使わないばあいにも、もとの名前を一字はぶくとか一字加えるとか、そういうことはしないで、ただ綴りをあれこれひっくり返して作り直した名前に限られているようでございます。つまり、Carmilla – Millarca といった具合に」⁴¹とある。『吸血鬼ドラキュラ』については、前述の武藤がジョン・ポール・リケルムの指摘について紹介しているように、ヴァン・ヘルシング (Helsing) は、英語・イギリス人 (English) を入れ替えたアナグラムとなっている⁴²。また、キム・ニューマンの壮大なパロディ小説である『ドラキュラ紀元』シリーズの三作目にあたる『ドラキュラ崩御』では、吸血鬼アニバス (Anibas) がサビーナ (Sabina) という偽名を使っていることについて、「どうしてヴァンパイアはこうしたトリックが好きなのだろう」⁴³などと述べられたりする。このように吸血鬼小説の中では登場人物の名前を利用したトリックや遊びを見つけることができるが、「ヴラド」の中でも、登場人物の名前に注目することが重要なように思われる。実際、ナバロの娘マグダレーナやアスンシオンなど、名前について説明される箇所が複数あり、まるでフエンテスは名前に注意するようにとでも言っているかのようなのである。

「ヴラド」の中で、フエンテスはエロイ・スリナガの紙片を通じて、ルーマニアの伝説の吸血鬼の名を列挙しているが、⁴⁴ それらではいわゆる伝説上の名称とその特徴に沿うものとそれに異なるものがある。作品の中で、「モロニ」は「変身能力を持つもの」と説明されるが、実際は「モロイイ」⁴⁵で「生ける吸血鬼」のことである。「ストリゴイ」について、フエンテスは「墓の中で目を開けたもの」としているが、これは「ストリゴイイ」⁴⁶と呼び、「死せる吸血鬼」を指す⁴⁷。「ヴァルコラキ」については、「月を貪る吸血鬼」として、フエンテスも伝説の通りに書いている。また、「ノスフェラトゥ」についても、「新婚の部屋に現れ、男を不能に、女を不妊にする」という特徴を伝説の通りに紹介している。「ルゴシ」について、フエンテスは「生きた死体」と紹介しているが、実際はホラー映画の俳優「ベラ・ルゴシ」である。本名をベラ・ブラスコといい、ルゴシは彼の出身地であるルーマニアの地名ルゴージュから採られたものであろう⁴⁸。このように、フエンテ

スは、ルーマニアの伝承に基づいて正しい名称と改変した名称を、正しいものには正しい特徴を、改変したものにはフエンテスが作った特徴を与えて、恐らく意図的に混在させていることが読み取れる。ここで「ヴラド」の中に現れるそれぞれの名前が意味を持つことを意識させることになる。

「また、「ヴラド」では、登場人物の名前とその守護聖人についての記述が何度か現れてくる。そこで登場人物の名前と守護聖人について考えてみる。ナバロの家の家政婦であるカンデラリアは「ろうそく祝別の日」の意味であるが、ペルーでは「間抜けな人」の意味も持つ。映画『吸血鬼ドラキュラ』では、吸血鬼を寄せ付けないようにと置いてあったニンニクを、間抜けな召使いが取り払ってしまったために、ルーシーはドラキュラに襲われ、彼女も吸血鬼となってしまう。ナバロの娘、マグダレーナの友人チェピーナ(ホセフィーナ)は受胎告知の3月25日が記念日であり、ナバロの妻、アスンシオンは、その名前の通り被昇天で8月15日である。そしてマグダレーナはマグダラのマリアであり7月22日となる。「ヴラド」の中ではアスンシオンとチェピーナの聖人の日は語られるが、マグダレーナ⁴⁹については語られない。マグダレーナの聖人であるマグダラのマリアは、『岩波キリスト教辞典』によると、イエスに従って遊女から聖女となった「複雑な存在」であり、文学においても「罪の女」、「愛に乾いた女」、「キリストを男として愛した女」、「使徒の中の使徒」、そして現在では「自己実現をした女性」などのさまざまなイメージで解釈されている。ヴラドは娘のミネアに瓜二つのマグダレーナを自分の妻として選ぶ⁵⁰が、マグダレーナとヴラドの関係を考えると、ヴラドは吸血鬼にしてイエスあるいは神の力を持つ存在であると推測できる。ヴラドはナバロの息子ディディエの復活を予告し、家もろとも消え去るが、その後、ナバロは自分の車の中で、恐らく息子であると思われる、動く何かを見つけることになる。ヴラドは死者を蘇らせる神のような力を持っていることが理解できるだろう。また、ここで古代メキシコの神々が、生贄の血を求める神だったことが思い出される。

ヴラドの召使いであるせむしのボルゴの「ボルゴ」という名前は、『吸血鬼ドラキュラ』のドラキュラ伯爵の城があるトランシルバニアの峠の名称と重なっている。ナバロが「小さなせむしだがこの上ない容貌で」⁵¹と説明するように、ボルゴは彫刻のように整った顔の人物である。ドラキュラの召使いという点で、他のドラキュラを扱った作品を思い出してみると、例えば、映画『ヴァン・ヘルシング』では、ドラキュラの召使いイゴールが登場するが、その風貌は異なっており、まるでゾンビを思わせる怪物である。また映画『ロマン・ポランスキーの吸血鬼』にもせむしの召使いが登場するが、やはり怪物を思わせる醜い男である。そして原作の『吸血鬼ドラキュラ』にしたがった他の映画では、ドラキュラの召使いはもっぱら精神病者のレンフィールドであり、彼はハエやクモを食べる異様な人物である。ここで、この召使いは、その名はボルゴであるが、

これまでのドラキュラとの関連ではなく、征服以前のメキシコの神々との関連でみると、その位置づけが明らかになってくる。

『マヤ・アステカ神話宗教事典』によると、こびとやせむしは、マヤでは雨の神チャック・モールの子供であり、雨をもたらす力があると考えられていた。またアステカにおいて稲妻の神トラロックはこびとやせむし、奇形と関係していたという⁵²。こびとやせむしといったイメージもまた、メキシコとの関連で見えていくと神々へと繋がっていくものであり、この「小さなせむし」のボルゴが、吸血鬼であり神としての存在であるヴラドの召使いであるのは納得できるだろう。

そして、最後に前章で挙げたミネアについてであるが、彼女はヴラドへ吸血鬼として不死を与えた吸血鬼の少女であった。彼女の名前はどうかであろうか。なぜ『吸血鬼ドラキュラ』に登場するミナのままではないのだろうか。これは先に挙げた、吸血鬼小説で好まれるアナグラムとして考えると理解できるだろう。ミネアは Minea と表記されているが、これを並び替えてみると、Anime と読むことができる。これはスペイン語の動詞 *animar* の接続法現在形の 1 人称または 3 人称の単数形であり、この動詞の一般的な意味は「励ます、促す、活気づける、」そして、「[神が] 命を与える」である。そしてそれぞれの活用形の意味からすると「命を与えましょう」、「命を与えて下さい」となる。ここでもやはり神の存在と関わってくるのである。

ヨーロッパとは異なる文化との関係の中で吸血鬼は神へと変化する。ヴラド＝ドラキュラはヨーロッパからやってきて、メキシコにおいては、神の力を持ち、ナパロの妻アスンシオンと娘マグダレーナを奪う。また息子のディディエの復活を予告し、まるでメキシコの神であるかのように「歴史の起源にある古き生贄の乾き」⁵³と語る。先に述べたように、先住民の神であるシワテテオは吸血鬼にして「女神」であった。そして、かつて神々への「血の負債」の瀉血により血を捧げてきたメキシコは、この吸血鬼＝神にとってまさに活躍の舞台となるだろう。彼は「二千万のおいしいモロンガ！」⁵⁴と叫ぶが、爆発的な人口で警察も機能しないメキシコ市は吸血鬼＝神が闊歩するには恰好の舞台となる。フエンテスの「ヴラド」において、ドラキュラはただ単にメキシコへやってきたわけではないのである。⁵⁵

7. おわりに

これまで論じてきたように、カルロス・フエンテスの「ヴラド」という作品は、先行する吸血鬼小説や映画のパロディとして、その背景を考察してみると、理解を深めることができるだろう。いくつかの先行作品が抱えていたテーマを含み、それらに批評的立場を表明すると同時に、さらにそれは読みを深めることによって初めてメキシコの歴史や文化へと繋がっていくものであった。また、「ヴラド」の読みを通じて、吸

血鬼文学や映画が、単一の文化や単一の歴史によって作られてきたものではないという理解をすることができるだろう。それはカルロス・フエンテスの近年の評論などのテーマであると考えられる複数性の文化、複数性の歴史といった視点へと繋がってくることになる。

フエンテスはメキシコだけではなく新旧両大陸全体の問題として、新大陸征服の問題をたびたび取り上げてきた。彼のエッセイ集である『これを信じる』には、次のような文がある。

アジア、アフリカ、そしてラテンアメリカの疎外された人々の歴史における存在の征服または再征服は、千年期の重要な出来事の一つであった。それ以前は、ただ一つの歴史ではなかった、多くの歴史があった、ただ一つの文化ではなかった、多くの文化があった、という訳である。⁵⁶

吸血鬼文学というジャンルから、あるいは吸血鬼という伝承文化から捉えた場合にも、この「ヴラド」という作品の読みには、恐らくこのような複数性の視点が必要とされるだろう。複数の歴史、複数の文化の接触の結果として生み出されたのは征服であったわけだが、また、それは融合や混交性といったものも生み出してきたとも言える。先に述べた通り、吸血鬼伝説は世界中に広がっているのである。

『吸血鬼ドラキュラ』からイギリスとアイルランドにおける政治的対立や外国恐怖が読まれていることを先に挙げたが、南米においても、同様に外国恐怖的な傾向が見られるという。フランスの民族学者ナタン・ワシュテルは、民族誌の研究から『神々と吸血鬼』という著書の中で、ボリビアの吸血鬼について次のように述べている。

カリシリ（リキチリとも呼ばれ、ペルーではナカフ、またはピシュタコと呼ばれる）は、（中略）通常グリーンゴ、すなわち白人男性として描かれる。外部世界の悪魔的擬人化というわけだ。⁵⁷

現代において、ボリビアの吸血鬼もまた、外国恐怖に基づく存在であり、吸血鬼という存在は、やはり他者表象の一つのシンボルとなっているのである。

また、メキシコをフィールドに研究している文化人類学者の吉田栄人は、ラテンアメリカの吸血鬼について、「ラテンアメリカの吸血鬼伝承を共同体との関係から生成される『異人殺しのフォークロア』」⁵⁸と捉えている。『吸血鬼ドラキュラ』を思い出してもわかるように、吸血鬼は今も昔も国家や共同体にとっての他者を排除するための象徴的存在として扱われているといえるだろう。

「ヴラド」の中で、ヴラド・ラドゥは「友人のために、いつも私はヴラドである」⁵⁹と語る。恐らくヴラドは、この自らの他者表象における位置づけを理解した上で、この発言をしているのであろう。ヴラド自身が、上位の概念的な吸血鬼の言説そのものへと変化するのである。そして、ナバロはこの哀れな存在でもあるヴラドを理解しようとする。吸血鬼の言説が、他者疎外の言説であったとすると、次のヴラドの言葉は象徴的である。

私は仲間と出会ったのでした。私は創造者ではない、ナバロ、私はただの被造物、あなたはわかりますか、私はあなたのように時間の中を生きてきた。あなたのように、死んでいたことでしょう。少女は私から時間を奪い、永遠へと導いた……⁶⁰

これは、ヴラドがナバロに対して、ミネアとの出会いを語る場面で発せられるものであるが、「あなたのように」と繰り返し、他者である自分も特別な存在ではないと言っているかのようである。また、この箇所はやはり上位概念的な歴史とは何かという問いを感じさせる文であるように思われる。ミネアとヴラドの関係は、互いに仲間として出会い、過去の時間の中の存在から、現在へと至る歴史そのものとしての存在へと移り変わっていくようにも感じられる。そして、メキシコで神となったヴラドは現在へと連なる出会いの歴史を「あなたのように」具現し、それを語る存在へと変化したようにも読めるのである。これまで論じてきた通り、吸血鬼文学というジャンルが描いてきた歴史が、他者との出会いと混交という関係から成っていると読めるように、人々の歴史もまた、相互の出会いと混交から成り立っていることを、「ヴラド」という作品の読みを通して想起させられるだろう。

この「ヴラド」という作品は、吸血鬼というジャンルの複数の先行する小説や映画といった媒体を越えて生まれたパロディであると考えられるが、いわゆる吸血鬼文学というジャンルの歴史をみても、吸血蝙蝠のイメージにみられるような文化的な混交性が生み出されてきたといえる。また同様にこの作品自体も複数の先行作品のパロディの体裁を利用しながら、永遠を生きるドラキュラと現在のメキシコを結びつけ、共時的な混交性を生じさせている。そしてそれは、歴史の中で他者とともに生きる現代社会におけるわれわれの文化の姿を浮かび上がらせるのである。このように考察してみると、この「ヴラド」という作品は、幻想的な吸血鬼文学に位置づけられるとしても、やはりカルロス・フエンテスの作品の読みにおける重要な視点である他者の問題、関係性の問題を読み取ることができるのではないだろうか。

注

1. この論文はカルロス・フエンテスの短編「ヴラド」を扱うものであるが、本文中で「ヴラド」、ヴラド、ヴラッドなどの表記が登場してくる。それぞれ、短編の作品タイトル、ヴラド・ツェペシュと小説の登場人物であるヴラド・ラドゥ、そして、引用のままに用いたヴラド・ツェペシュを意味する。
2. 私事ながら、この作品が出版された2004年に筆者はメキシコへ留学していた。当時、メキシコではアン・ライスの《ヴァンパイア・クロニクル》のシリーズなど吸血鬼小説が流行っている印象を受けていた。そして、それからしばらくしてこの『心細い同伴者』が出版された。
3. 筆者が調べたところでは、この作品は未だ英訳も出版されていないようである。そのため、ここで「ヴラド」の簡単なあらすじを紹介したい。

フランス系の血をひく主人公のイヴ・ナバロは、パトロンの弁護士エロイ・スリナガから、彼のソルボンヌ時代の友人であるウラジミール・ラドゥの家をメキシコ市内に探すようにと依頼を受ける。ナバロは妻のアスンシオンに部屋を探してもらい、自分はルーマニアからやってくるパトロンの友人のために、契約の書類を用意する。ナバロとその妻には2人の子どもディディエとマグダレーナがいたが、ディディエを事故で失ってしまっており、3人家族と家政婦のカンデラリアの4人で暮らしている。ナバロは客の求める家が、窓を全部埋めてしまっていて、地下に谷へと抜けるトンネルが必要であると依頼されていることを妻に説明する。その後ナバロは書類を持って客の家を訪ね、この客と会うが、彼は友人たちの間ではヴラドと呼ばれていると聞かされる。そしてナバロはヴラドの家で食事をとることになり、彼の奇妙な話を聞かされる。また、ヴラドはナバロの家族に強い興味を示す。召使いのボルゴに見送られて、ナバロは家路に就く。家に戻り妻と夜の営みを行うが、そこで彼は異変を感じる。昼に目覚めると妻は仕事に出ており、娘は、父親がヴラドの家の工事をおこなったという友人のチェピーナの誕生パーティに出席すると聞かされる。そして、またもやスリナガから依頼されて、ナバロは再び客の家へ行くことになる。そこで体毛はなく透き通った爪のヴラドは彼の家族に異常な興味を示す。ナバロはヴラドの家で目覚め、家の中をさまようが、そこで、子ども用のピンク色の衣装を見つけ、さらにはトンネルで目のないヴラドを見つける。彼は急いで家へ帰るが、召使いから妻も娘も帰らなかったと知らされ、娘を捜すが見つからず、スリナガに会って事実を聞かされる。スリナガの手紙にはヴラドが中世ルーマニアの君主であり、不死者であると書かれている。ナバロは再びヴラドの家へ行くと、娘のマグダはヴラドの娘ミネアと共におり、彼は妻を捜して、逃げようとするが、彼女は永遠に死ぬことのない娘とともにヴラドの元に残ると語る。ナバロはヴラドと対面し、彼を説得しようとするが、ヴラドは生涯やミネアのことを語り、結局、妻も娘も戻ることはなく、ヴラドは彼に息子を蘇らせると話す。ヴラドや家族とともに家は消滅し、彼は自分の車の中で動く何ものかを見つける。

4. フェンテスに関する最新の略歴は2009年6月に出版された河出書房新社の『世界文学全集 II-08』に含まれる『老いぼれグリンゴ』の解説(安藤哲行)を参照するのがよいだろう。
5. 2008年11月10日より14日まで、メキシコ国立自治大学で行われた。
6. *Sólo*, p. 45.
7. このヴラド・ラドゥ(Vl adRadu)のラドゥは、恐らくヴラド串刺公の弟であるラドゥ美男公(1438/9-1500)や『ドラキュラ伝説』の著者の一人、ラドゥ・フロレスクから採られたものと思われる。エロイ・スリナガのヴラドについての説明の箇所(*Inquieta compañía*, pp. 264-268.)では『ドラキュラ伝説』からそのまま抜き出したかのような説明がなされる。
8. 『ドラキュラ伯爵のこと』pp. 251-253. 串刺し刑はツェペシュの発明ではなく、ヘロドトスが“野蛮人の習慣だった”とするように古来から行われてきた。ストイチェスクはフランスのルイ11世やイヴァン3世、リチャード3世、ルーマニアのシュテファン大公などを例に挙げ、ヴラドの残虐性が特異ではないとしている。
9. 『魔女(上)』p. 26. キリスト教国の他の貴族たちの模倣、あるいはトルコの模倣。ヴラドは人質としてトルコに抑留されていた時期に残虐性を身につけたとする意見が多いが、トルコのスルタンがヴラドの残虐性を恐れたのだから、恐らくトルコの影響ばかりではないだろう。「ヴラッド・ツェペシュは最後の最後までトルコと戦う決意を固めており、残虐行為を加えてトルコ兵を追い散らすのが目的でなく、トルコと徹底的に戦うのが目的である、(中略) 自国だけを守るのではなく、キリスト教徒全体のために戦うのが目的であることをツェペシュはよく知っていた。」『ドラキュラ伯爵のこと』p. 118.
10. 『ドラキュラ伯爵のこと』p. 55.
11. 同, p. 222.
12. 同, p. 225.
13. *Los <<Dracula>> Vlad Tepes, el empalador, y sus antepasados*, p. 186.
14. 『「ドラキュラ」からブンガク』p. 68.
15. 武藤はこのイギリスの『パンチ』とアイルランドの『アイリッシュ・パイロット』における双方を吸血蝙蝠に見立てた絵を並べ、その対立を指摘している。
16. *Inquieta compañía*, p. 233. ヴラドはナバロに ¿Siente usted la nostalgia de sus antepasados ? と尋ねる。
17. 『吸血鬼ドラキュラ』p. 229. (一部筆者により改編)
18. 同, p. 289.
19. 同, p. 294.
20. 『ドラキュラ伝説』pp. 205-206.
21. *Dark Banquet*, p. 36.
22. 同, p. 42.
23. 「狼の血と伯爵のコウモリ」『書物の王国12 吸血鬼』p. 223.
24. 同, p. 224.

25. 同, p. 224.
26. 十字路を避けるという俗信については、メキシコのみならず、ヨーロッパ、インドにも見られるとされる。『吸血鬼の事典』 pp. 188-189.
27. 『マヤ・アステカ神話宗教事典』 p. 188.
28. 『チチメカ神話 ミチョアカン報告書』 p. 62.
29. 同, p. 63. この訳注では、ベネディクト＝ウォーレンの *The Conquest of Michoacán* から、クエラウアペリ母神はアステカの皮剥ぎの神シペ・トテク (Xipe Totec) と雨の神トラロック (Tlaloc) の性格を共有していると紹介している。
30. スペイン王立アカデミー (Real Academia Española) 編纂のスペイン語辞典、*Diccionario de la lengua española* によると、この用法はアメリカのものとされている。また、メキシコ大学院大学 (El Colegio de México) 編纂のスペイン語辞典、*Diccionario del español usual en México* でも、口語として「賄賂」の意味を紹介している。
31. 当然、この比喩は皮肉としても受け取ることができるだろう。近年、ラテンアメリカを中心に、チュパカブラスという吸血鬼がブームとなった。吉田栄人はこの吸血鬼について、インターネットでの言説に関する研究をおこなっているが、彼は「チュパカブラスという記号 (シニフィアン) は明らかに本来の意味コンテクストから掛け離れたところで使用される例が増えていると言えよう」と述べ、チュパカブラスが性的な意味を含めたセクシャル・ジョークへと変化していることを指摘している。このモルディエダの比喩も、このようなジョークとしての側面でも捉えられるのではないだろうか。
32. 『パランプセスト』 p. 69.
33. 『パロディの理論』 p. 43.
34. 同, p. 44.
35. 同, p. 41.
36. 『夜明けのヴァンパイア』において、この女はマドレーヌという名前である。ナバロの娘マグダレーナは、フランス語でマドレーヌ。「ヴラド」の中でもこの名前についてのエピソードが語られている。*Inquieta compañía*, p. 225.
37. 「ヴラド」ではナバロの妻アスンシオンが息子のディディエの死が原因で、娘マグダレーナの不死を求めるが、『インタビュー・ウィズ・ヴァンパイア』での母と娘の姿と重なり合ってくるだろう。
38. *Inquieta compañía*, p. 273. “Vlad escoge a voluntad sus edades,”
39. 同, p. 277.
40. 『パロディの理論』 p. 16, p. 21, p. 41. など。
41. 『吸血鬼カーミラ』 p. 370.
42. 『「ドラキュラ」からブンガク』 p. 65.
43. 『ドラキュラ崩御』 p. 119.
44. *Inquieta compañía*, p. 266.
45. これから挙げる吸血鬼の名称と特徴については、マシュー・バンソンの『吸血鬼

の事典』に従う。

46. 『ドラキュラ伝説』では「ストリゴイ」とし、夜の魔鳥と説明している。『ドラキュラ伝説』p. 192.
47. ストリゴイイに対しては、ワインがその攻撃の防御の一つとなり、フェンテスのこの小説でヴラドがワインを断るほか、さまざまな小説や映画などで、ドラキュラが客人にワインを勧めるが、本人は飲まないというシーンの理由となると思われる。
48. ちなみに、実際には人間である映画俳優を吸血鬼に仕立て上げてしまうというアイディアは、映画『吸血鬼ノスフェラトゥ』でオルロック伯爵を演じた俳優マックス・シュレックが、実は吸血鬼だったとした一種のパロディ映画『シャドウ・オブ・ヴァンパイア』を思い起こさせる。
49. 『ロマン・ポランスキーの吸血鬼』に登場する宿屋のメイドもマグダである。吸血鬼となった宿屋の主人に襲われる。
50. 吸血鬼と二人の少女については、レ・ファニユの『吸血鬼カーミラ』や映画『ドラキュラ血のしたたり』などが連想される。『ドラキュラ血のしたたり』では双子の少女フリーダとマリアが登場する。
51. *Inquieta compañía*, p. 236. “un jorobadito pequeño pero con las más bellas facciones que...”
52. 『マヤ・アステカ神話宗教事典』pp. 132-133.
53. *Inquieta compañía*, p. 284. “la sed del sacrificio antiguo que está en el origen de la historia...”
54. 同, p. 274. “¡Veinte millones de sabrosas morongas!” 「モロンガ」は動物の血の腸詰め。また、メキシコシティの人口は一般的に二千万人（Veinte millones）とされている。
55. クエンティン・タランティーノとロバート・ロドリゲスの映画『FROM・ダスク・ティル・ドーン』と『FROM・ダスク・ティル・ドーン 3』のラストシーンでは、吸血鬼たちの住处である酒場の裏にメキシコのピラミッドが現れてくる。これもまた、吸血鬼たちが神々であることを示すものと思われる。
56. *En esto creo*, p. 129. “La conquista o re-conquista de la presencia histórica de los pueblos marginados de Asia, Africa y América Latina ha sido uno de los hechos fundamentales del milenio. Resulta que no había una sola historia. Había muchas historias. No había una sola cultura. Había muchas culturas.”
57. 『神々と吸血鬼』p. 60.
58. 『チュパカブラス —— ラテンアメリカにおける新たな吸血鬼伝承——』
59. *Inquieta compañía*, p. 284. “Siempre soy Vlad, para los amigos.”
60. 同, p. 277. “Había encontrado mi compañía. No soy un creador, Navarro, soy una criatura más, ¿entiende usted?... Yo vivía, como usted, en el tiempo. Como usted, habría muerto. La niña me arrancó del tiempo y me condujo a la eternidad...”

参考文献

- ◆ El Colegio de México. *Diccionario del español usual en México*. México, El Colegio de México. 2002.
- ◆ Fuentes, Carlos. 'Vlad'. *Inquieta compañía*. México, Alfaguara. 2004.
- ◆ . *En esto creo*. Barcelona, Seix Barral. 2002.
- ◆ Karttunen, Frances. *An Analytical Dictionary of Nahuatl*. University of Oklahoma Press. 1992.
- ◆ Märtin, Ralf-Peter. *Los <<Dracula>> Vlad Tepes, El emperador y sus antepasados*. Barcelona, Tusquets. 2000.
- ◆ Real Academia Española. *Diccionario de la lengua española*. Madrid, Espasa Calpe. 2004.
- ◆ Rodríguez Munguía, Luis. 'Fuentes en su sangre'. *Sólo*. México, Sanborn Hnos. 2004.
- ◆ Schutt, Bill. *Dark Banquet. Blood and The Curious Lives of Blood-Feeding Creatures*. New York, Crown Publishing. 2008.
- ◆ Stoker, Bram. *Dracula*. New York, Oxford University Press. 2008.
- ◆ Summers, Montague. *Vampires And Vampirism*. New York, Dover Publications. 2005.
- ◆ 大貫隆、名取四郎、宮本久雄、百瀬文晃編。『岩波キリスト教辞典』 岩波書店。2002。
- ◆ 下楠昌哉。「アイリッシュ・ヴァンパイア」『書物の王国12 吸血鬼』 国書刊行会。1998. pp. 225-229.
- ◆ ジュネット、ジェラルド。『パランプセスト 第二次の文学』 和泉涼一訳。水声社。1995。
- ◆ ストイチェスク、ニコラエ。『ドラキュラ伯爵のこと』 鈴木四郎／鈴木学訳。恒文社。1980。
- ◆ 丹治愛。『ドラキュラの世紀末 ヴィクトリア朝外国恐怖症の文化研究』 東京大学出版会。1997。
- ◆ 長山靖生。「狼の血と伯爵のコウモリ」『書物の王国 12 吸血鬼』 国書刊行会。1998. pp. 222-224.
- ◆ ニューマン、キム。『ドラキュラ紀元』 梶元靖子訳。東京創元社。1995。
- ◆ . 『ドラキュラ戦記』 梶元靖子訳。東京創元社。1998。
- ◆ . 『ドラキュラ崩御』 梶元靖子訳。東京創元社。2002。
- ◆ ハッチオン、リンダ。『パロディの理論』 辻麻子訳。未来社。1993。
- ◆ バンソン、マシュー。『吸血鬼の事典』 松田和也訳。青土社。1994。
- ◆ マクナリー、レイモンド・T.／フロレスク、ラドゥ。『ドラキュラ伝説』 矢野浩三郎訳。角川書店。1978。
- ◆ ミシュレ、ジュール。『魔女(上)』。篠田浩一郎訳。岩波書店。1983。

- ◆ ミラー、メアリー／タウベ、カール、『マヤ・アステカ神話宗教事典』 増田義郎監修／武井摩利訳. 東洋書林. 2000.
- ◆ 武藤浩史、『「ドラキュラ」からブンガク』 慶應義塾大学教養研究センター. 2006.
- ◆ 吉田栄人、「チュパカブラスーラテンアメリカにおける新たな吸血鬼伝承」『記号の生成・伝播およびその変容に関する研究』 東北大学. 2000.
<http://www.intcul.tohoku.ac.jp/syoshida/works/2000/chupacabras.htm>
- ◆ ライス、アン、『夜明けのヴァンパイア』 田沼隆一訳. 早川書房. 1987.
- ◆ ル・クレジオ、J・M・G. 『チチメカ神話—ミチョアカン報告書—』 望月芳郎訳. 新潮社. 1987.
- ◆ レ・ファニユ、『吸血鬼カーミラ』 平井呈一訳. 東京創元社. 1970.
- ◆ ワシュテル、ナタン、『神々と吸血鬼』 齋藤晃訳. 岩波書店. 1997.

映画

- ◆ *Bram Stoker's Dracula*. (US, 1992). 『ドラキュラ』
- ◆ *Dracula*. (US, 1932). 『魔人ドラキュラ』
- ◆ *Fright Nigit*. (US, 1985). 『フライトナイト』
- ◆ *From Dusk Till Dawn*. (US, 1996). 『フロム・ダスク・ティル・ドーン』
- ◆ *From Dusk Till Dawn 3*. (US, 2001). 『フロム・ダスク・ティル・ドーン 3』
- ◆ *Horror of Dracula*. (US, 1957). 『吸血鬼ドラキュラ』
- ◆ *Interview with the Vampire*. (US, 1994). 『インタビュー・ウィズ・ヴァンパイア』
- ◆ *Nosferatu*. (Germany, 1922). 『吸血鬼ノスフェラトゥ』
- ◆ *Nosferatu, The Vampire*. (Germany, 1979). 『ノスフェラトゥ』
- ◆ *Shadow of the Vampire*. (US, 2000). 『シャドウ・オブ・ヴァンパイア』
- ◆ *The Fearless Vampire Killers or: Pardon Me, But Your Teeth Are in My Neck*. (US./UK, 1966). 『ロマン・ポランスキーの吸血鬼』
- ◆ *Twins of Evil*. (UK, 1971). 『ドラキュラ血のしたたり』
- ◆ *Van Helsing*. (US, 2004). 『ヴァン・ヘルシング』

Dracula in Mexico: A Study of Carlos Fuentes's "Vlad"

Carlos Fuentes is one of the best known writers of the Boom of Latin American Literature in the 1960s. Scholars have mostly focused on Fuentes' search for Mexican identity in his works. The other aspects of his works, however, such as his uses of points of view, his international experience, and especially the 'relativity' in his use of parody and in his descriptions of otherness, families and politics, have not sufficiently be focused on. This paper aims to show how the "relativity" functions in "Vlad," a fantastic story by Fuentes which was published in 2004 along with five others in *Inquieta compañía*. I also aim to examine the recent interest of Fuentes by focusing on European *Dracula* and other texts and movies, which are referred to in "Vlad."

Dracula, the famous novel by Bram Stoker, has been read as an expression of oppositions between countries and between communities, or of xenophobia. By reading "Vlad" we find that *Dracula* also contains an aspect of cultural amalgamation, which appears in the descriptions of vampire bats that in reality inhabit only Middle and South America. "Vlad" draws attention to that cultural mixture in *Dracula*. And a close reading of the story makes it clear that vampires once were gods in Mexican indigenous culture. The *metamorphosis* from European *Dracula* to Mexican *Dracula* shows Fuentes's text's "relativity."

It is possible to read "Vlad" as a parody, because the story contains many details from previous texts and movies about vampires. The European vampire becomes a god in Mexico, and this can be seen by examining characters' names in "Vlad." Even though it is one of Fuentes's fantastic stories, "Vlad" indicates his recent interest in relativity, which can only be expressed in the relation of otherness.